広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第55号　2006　153－162

沖縄津堅島方言における「に」格助詞相当助詞の記述的研究

― 動作・作用成立に関与する対象・結果・目的表示機能を中心に ―

又　吉　里　美

（2006年10月５日受理）

A Descriptive Study of the Tsuken Dialect Case Particles [ni], [Nka], and [ʃi] which are Equivalent to the Japanese Case Particle [ni]
― The Function of Marking Entities, Results, and Purpose which are Concerned with Formation, Operation, and Action ―

Satomi Matayoshi

This paper surveys the Tsuken island dialect of Okinawa Prefecture, Japan. This paper researches the case particles [ni], [Nka], and [ʃi] which are equivalent to the Japanese case particle [ni]. The following five points are elucidated:

1) The three case particles [ni], [Nka], and [ʃi] are distinguished in usage.
2) When used with a verb with the character of “movement”, all three particles are used. [ni] is used when the entity is a person. [Nka] is used when the entity is non-human. [ʃi] is used when emphasising directionality. [Nka] and [ʃi] both have ties to the locative case.
3) Tsuken dialect [ni], [Nka], and [ʃi] stand in the same relationship with [tu] as Standard Japanese [ni] does with [to].
4) In the function of marking an entity, [ni], [Nka], and [ʃi] have the function of marking the aim of or partner in an action, and form a one-sided relationship with the target. On the other hand, [tu] has the function of marking the partner in joint work and those who operate together.
5) In the function of expressing result, a null-particle, [Nka], and [ʃi] have the function of marking the result of a unidirectional change or an essential change. On the other hand, [tu] has the function of marking the result of bidirectional or mechanical change.

Key word: The Tsuken dialect, Case particle, Function of marking entities, Function of marking result, Function of marking purpose
キーワード：津堅島方言，格助詞，対象表示機能，結果表示機能，目的表示機能

１．はじめに

1.1. 日本語の格助詞「に」の研究史

日本語の格助詞「に」の研究は，およそ次のように大別される。①格助詞「に」の意味機能と用法の形態的な研究，②格助詞「に」の語源や発生，③格助詞「に」とその他の格助詞との相互関係，④格助詞「に」と動詞との関係に着目した構文論的研究の四つである。

①の「に」の意味機能と用法についての研究は，江戸時代のいわゆる国学の時代から見られる。以降，

大槻文彦，山田孝雄，松下大三郎，橋本進吉らによって体系的に整理されるようになった。

②の「に」の語源の研究については，いわゆる，格助詞「に」の通事的研究，歴史的研究として位置づけられるだろう。格助詞「に」の語源として，諸説を挙げると，次の通りである。[1]副詞語尾の「に」から発生したとする説，[2]形容動詞や副詞句との関連から状態を指示する「に」と同様のものとする説，[3]万葉集に見られる時間的概念語を総括・限定する「な」(「朝な夕な」の「な」) を前身とする説，[4]動詞を起源とする説など様々な説が挙げられている。しかし，「に」は古くから，すでに格助詞として機能しており，その研究手法も，帰納法というよりも演繹法にならざるを得ないところがあり，語源や発生については特定することが困難な状況だというのが，諸研究者の見解である。

格助詞「に」は他の格助詞と比較して，多くの意味機能を持っている。それゆえ，「に」の研究において，③の格助詞「に」とその他の格助詞との相互関係についての研究は，多くなされている状況であると言えるだろう。[5]「に」と「と」,「に」と「へ」,「に」と「を」,「に」と「から」,「に」と「で」というように，「に」と諸格助詞との相互関係，使い分けなどの研究がなされている。このことからも，格助詞「に」がいかに多くの意味機能を有しているかということが分かる。

また，村木新次郎は[6]格体系のモデル図を次のように掲げている。まず，格助詞を文法格(「ガ」「ヲ」「ニ」)，場所格 (「カラ」「へ」「ニ」)，関係格 (「ヨリ」「ト」「ニ」) の三つに分け，その他，状況格「デ」，数量格「φ」を別に配している。このモデル図において，「ニ」は文法格，場所格，関係格の三つのグループに属することになる。格助詞「に」の多機能性を捉えたモデル図であると思われる。

最後の④の「に」と動詞との関係に着目した構文論的研究については，③の研究とも関わるものである。自動詞と他動詞という動詞形態や動詞の意味から「に」の意味機能を分析考察した研究や動詞を中心に，その他の格助詞との語順関係から「に」の意味機能を分析考察した研究などがある[7]。

以上のように，格助詞「に」はその多機能性から，格助詞研究の中でも，重要な位置にあると考えられる。したがって，日本語の中の一方言である琉球方言においても，「に」格助詞相当の助詞についての研究は，同様に意義ある研究であると考える。

1.2. 琉球方言における「に」格助詞相当助詞の研究と本研究の位置づけ

琉球方言の研究は各集落ごとの差異が大きいため，まずは，各集落ごとの音韻，語彙，文法を記述することが優先されてきた。したがって，助詞の研究も各集落の形態論的，記述的研究が諸研究者によってなされてきた。特に，内間直仁，中松竹雄，野原三義らの研究により，琉球諸方言の助詞の意味機能，用法が明らかにされ，その功績は大きいと言える。

また，琉球方言における歴史的研究では，歴史的研究に必要な文献・資料の少なさからほとんどなされていない。そのような状況にあって，特に『おもろさうし』が文献資料として用いられてきた。高橋俊三 (1991)，中松竹雄 (1987) の研究に，その『おもろさうし』中の「に」の用法の研究を行ったものがある。

以上が，琉球方言助詞及び，格助詞「に」相当助詞の研究史である。すなわち，琉球方言助詞の研究は，先に挙げた日本語の「に」の研究の①，②の段階であると言える。次の研究段階として，③その他の格助詞との相互関係を明らかにする研究や④構文論的な研究に進むことが求められるであろう。③その他の格助詞との相互関係を明らかにする研究は名嘉真三成(2000)や西岡敏 (2004) の研究にも見られるが，これらの研究は日本語の研究でいうところの「に」と「へ」との相互関係，使い分けについての研究，すなわち，場所格や方向格といった機能に当たる研究である。

一方，本研究は，動作・作用の成立に関与する対象・結果・目的表示機能についての研究である。また，相互関係は日本語助詞の「に」と「と」とに対応する［ni］と［tu］との関係に言及するものである。また，津堅島方言では「に」に当たる助詞に二つの助詞，すなわち，［Nka］と［ni］が認められる。その［Nka］と［ni］との使い分けについても分析考察する。その他，方向の意味機能が色濃い格助詞［ʃi］とも関係があるので，［ʃi］も併せて，分析考察を行う。したがって，本稿は，［Nka］［ni］［ʃi］［tu］の四つの助詞の相互関係，使い分けについて分析考察を行うものである。

さらに，④の構文論的研究の手法を取り入れ，名詞，格助詞，動詞の相互関係から，助詞の意味機能を見出す。特に，動詞の意味に注目し，動詞との関係から，助詞の意味機能を見出すものである。本稿は，日本語の格助詞「に」の研究で行われている研究の③④の両方に対応するものであると考える。

2.「に」格助詞の機能

2.1. 標準日本語の「に」格助詞の機能及び諸機能に対応する津堅島方言助詞

日本語の格助詞「に」は様々な機能を有している。例えば，「時」「所」「原因」「対象」「結果」「目的」な

どを示す機能を持つ。主な「に」の機能を取りあげ，これらの「に」の諸機能を津堅島方言ではどのような助詞が担っているのか，対応する助詞を文例とともに以下に示す。

A【時】
①動作や事態の時，順序
「三時に会議がある。」
[8] △ saNɕini kaigiga aN. ／サンジニ カイギガ アン.
津堅島方言では，時間表示機能［ni］として扱う。

B【所】
①具体物・抽象物の存在位置
「私はこのホテルに泊まっている。」
△ waNja kunuhoteruNka tumatuN. ／ワンヤ クヌホテルンカ トゥマトゥン.
②着点
「壁にカレンダーを貼る。」
△ kabiNka kareNda: paruN. ／カビンカ カレンダーパルン.
津堅島方言では，場所表示機能［Nka］として扱う。

C【原因】
①原因
「酒に酔う。」
△ sakeʃi ju:N. ／サケシ ユーン.
津堅島方言では，原因表示機能［ʃi］として扱う。

D【対象】
①行為対象
「親に逆らう。」
△ ujani sakarauN. ／ウヤニ サカラウン.
②受取手・受益者
「子どもたちにお菓子をやる。」
△ kwaNsa:ni kwa:ʃi kiraruN. ／クヮンサーニ クヮーシ キラルン.
③相手
「田中さんに聞く。」
△ tanakasaNni kikuN. ／タナカサンニ キクン.

E【動作主】
①動作主（「使役」）
「彼にこれをやらせる。」
△ arini kuri jaraɸuN. ／アリニ クリ ヤラフン.
②動作主（「受身」）
「先生に叱られる。」
△ ʃeNʃe:ni nura:ruN. ／シェンシェーニ ヌラールン.

F【結果】
①変化の結果
「三つに分けなさい。」
△ mi:ʧiNka wakiri. ／ミーチンカ ワキリ.

F'【結果】（無助詞）
①変化の結果
「信号が赤に変わる。」
△ ʃiNgo:nu aka natuN. ／シンゴーヌ アカ ナトゥン.
津堅島方言では，無助詞（はだか格）として扱う。

G【目的】
①目的
「海に海水浴に行く。」
△ umiʃi ujugiga ikuN. ／ウミシ ウユギガ イクン.

以上の機能のうち，A は時間表示機能，B は場所表示機能，C は原因表示機能として扱い，本稿では取り扱わない。また，F' の結果表示機能については無助詞になるが，同じ結果表示でも，F の場合は［Nka］が用いられる。F' の無助詞については，結果表示機能の項で併せて分析考察することとする。したがって，本稿では，上記に挙げた機能のうち，D から G までの対象，結果，目的表示機能を研究対象とする。

3．沖縄津堅島方言における対象・結果・目的表示機能を持つ助詞

本節では，津堅島方言における動作・作用成立に関与する対象・結果・目的表示機能を持つ助詞を［Nka］［ni］を中心にして，自然傍受法で得られた文例に基づいて，分析考察する。また，［Nka］［ni］との関わりがある［ʃi］や無助詞についても適宜取り上げる。また，それぞれの機能の詳細については，次のように項目をたてることができると考える。

対象：①受取手・受益者表示機能②協調相手表示機能③自発性行為の意図相手表示機能④自発行為・習慣行為の対象表示機能⑤方向指示対象表示機能⑥偶発性状況表示機能⑦被所与者表示機能⑧対応関係表示機能⑨受身表現の行為・動作主表示機能⑩使役表現の行為・動作主表示機能

結果：①意志要望変化の結果表示機能②強制変化の結果表示機能

目的：①行動目的表示機能

以上の項目にしたがって，具体的な文例をもとに，格助詞と動詞との結合関係からそれぞれの格助詞の意味機能を考察する。

3.1. 受取手・受益者表示機能

津堅島方言では，受取手・受益者となる名詞を［ni］が承ける。文例は次の通りである。

○ kwaNsa:ni kirarana:.（of → of）／クヮンサーニ キララナー．／（米を）子どもたちにあげないでね？

○ kusa:nuʧu:ni nama katuNro.（of → of）／クサーヌチューニ ナマ カトゥンロ．／後ろの（家の）人に今，貸しているよ。

○ asa katsumi:ni mutauwa.（of → of）／アサ カツミーニ ムタウワ．／明日カツミに持たせるよ。

○ su:zu:ni aʨikituruba:te.（of → of）／スーズーニ アジキトゥルバーテ．／（お年玉を）スーズーに預けているわけ。

［ni］に結合する動詞は，「あげる」「貸す」「持たせる」などの物の移動に関わる動詞である。ただし，物の移動先，すなわち，承接する名詞は人称名詞である。つまり，移動が人から人へ行われることを表す動詞が結合する。

しかし，物の移動先が場所や物である時，すなわち，承接する名詞が，場所や物の場合には［Nka］が承接する。

○ puninu subaNka utsuibiNro:.（of → I）／プニヌ スバンカ ウツイビンロー．／船の隅の方においていますよ。

○ m makaijatiN ʃimuwa. makaiNka i:tisu:be.（of → I）／ン マカイヤティン シムワ．マカインカ イーティスーベ．／うん，お椀でもいいよ。お椀に入れておいで。

○ nabiNka ʃo:ju ʃigi:.（mm → I）／ナビンカ ショーユ シギー．／鍋に醤油を注げ。

また，［Nka］は「ある」や「いる」などの動詞との結合力が強い助詞である。これらのことから，筆者の一連の研究では，［Nka］は「存在」の意味機能を有していると結論づけた。つまり，上記の［Nka］の文例も，物質の存在場所（停滞場所）の移動であると考えられる。一方，［ni］の承接する名詞は人を表す名詞であり，結合する動詞は物質の移動の性質を持つ動詞である。物質が人から人へと移動することを表す。すなわち，物質の所有権（一時的なものを含む）が移動していると考えられる。［ni］は「所有」に関わる意味機能を有していると考えられる。

3.2. 協調相手表示機能

協調相手表示の場合にも［ni］が用いられる。文例は次の通りである。

○ higaʃeNʃe:ni kikiba wakaiNte.（om → I）／ヒガシェンシェーニ キキバ ワカインテ．／ヒガ先生に聞いたら，分かるよ。

○ ʃeNʃe:ni narahattaN.（of → I）／シェンシェーニ ナラハッタン．／先生に習ったよ。

この場合，結合する動詞は「聞く」「習う」などの動詞である。これらに共通のことを整理すると以下のようにまとめられる。

①情報や知識は人間の形而上的所有物である。

②「聞く」「習う」などの動詞の性質は，情報や知識の伝達である。伝達ということは，いわば一種の「移動」であるとも考えられる。

③「移動」が人から人へと人間の間で行われる。

ここでは，「所有」「伝達（移動）」「人」を先の3.1に共通の条件として取り上げることができる。3.1と異なるのは，移動の対象が物質ではないので，所有権の移動ではないことである。この場合は，知識や情報をAからBに伝達することで，情報や知識を共有する状態になることである。そして，その伝達の主導権は情報の発信者側，すなわち，この場合は動作対象にある。

3.3. 自発性行為の意図相手表示機能

自発性行為の意図相手を表示する時にも［ni］が用いられる。文例は次の通りである。

○ ni:saNni reNwakakiri…．（of → I）／ニーサンニ レンワカキリ…．／兄さんに電話かけて…。

○ ha: uppina: ja:jamuNʧiʃi waNni i:taN.（of → of）／ハー ウッピナー ヤーヤムンチシ ワンニ イータン．／はー，こんな大きな家なのにと私に言っていた。

上記の文例の動詞を見ると，「電話をかける」「言う」などの伝達の性質を持っていることが分かる。しかし，3.2と異なるのは，「聞く」や「習う」などの行為が相手の行為に任されるのに対して，ここの「電話をかける」「言う」は行為相手の意志は考慮されない。つまり，動作主が「電話をかける」相手や「言う」相手を意図的に選択し，行為相手として認識するのである。その相手を表示する場合に［ni］が用いられるのである。そして，この場合もやはり，承接する名詞は人称名詞である。

3.4. 自発行為・習慣行為の対象表示機能

自発行為・習慣行為の対象の表示には［Nka］が用いられる。文例は次の通りである。

○ je unu isuNka kuʃikakimiso:re.（of → of）／イェウヌ イスンカ クシカキミソーレ．／いぇ，この椅子に腰掛けてください。

○ ʔi uriru jamine mata pisaNka naʃimuNʧu.（of → of）／ッイ ウリル ヤミネ マタ ピサンカ ナシムンチュ．／うん，これ（薬を）ぞ，痛んだら，膝に塗るって。

○ pa:puɕiNka ti: usagiribe.（of → I）／パープジンカティー ウサギリベ．／先祖（仏壇）に手（を）合わせなさい。
○ pa:puɕiNka ho:kokuʃijo:.（of → I）／パープジンカ ホーコクシヨー．／先祖（仏壇）に報告しなさいよ。
○ i:ɸe:me:Nka ʃikiribe.（mm → mf）／イーフェーメーンカ シキリベ．／位牌の前に供えなさい。

ここで，注目したいのは，承接する名詞である。3.3までとは異なり，承接する名詞は「イス」や「膝」などの物質や身体の一部，また，「先祖」など観念的なものである。もっとも，この場合，「先祖＝仏壇」という意識があると思われる。すると，これも一物質として取り扱うことができるかもしれない。

これまでは，「人称名詞＋ ni ＋動詞」という形式であったが，承接する名詞が人称名詞ではない場合には［ni］は積極的には用いられない状況にある。そのかわりに［Nka］が用いられる。先にも説明したように，［Nka］は「移動と存在」の性質を持つ動詞との結合力が強い。ここも「イスに移動して座る」「薬を膝に移動させて塗る」ということである。つまり，「座る」も「塗る」も「移動と存在」，あるいは「停滞」の性質があると言える。ただし，単なる身体や物質の移動だけでなく，移動先での状態や形態に変化が伴うのである。例えば，「座りなさい」ということは，「立つ」から「座る」という状態変化を含むものである。また，「塗る」も元の軟膏の形態ではなく，軟膏の形態は変化している。つまり，動詞が持つ「移動」の行為に焦点があるのではなく，「座る」という行為，「塗る」という行為に焦点があるので，「イス」や「膝」は行為の対象として捉えることができる。したがって，この場合は場所表示機能ではなく，自発行為の対象を表す，対象表示機能として捉えることができるだろう。

3.5. 方向指示対象表示機能

承接する名詞が場所を表す名詞の時，方向と関わりの深い［ʃi］が用いられる。文例は次の通りである。
○ umaʃi reNwa kakitijo jo:kokara jobiraʃigaja:ʃi…（of → of）／ウマシ レンワ カキティヨ ヨーコカラ ヨビラシガヤーシ…．／（孫が）ここに電話かけてね，ヨーコから呼び出しかねーして…。
○ itta:ʃi reNwasu:taN.（of → mm）／イッターシ レンワスータン．／あなたたち（の家）に電話した。
○ gakko:ʃi ukuriNroʧi iNba:jo.（of → I）／ガッコーシ ウクリンロチ インバーヨ．／学校に遅れるよ，と言うわけ。

3.3にも「電話をかける」という動詞が用いられた文例が見えるが，3.3では［ni:saNni］というように［ni］格助詞が用いられている。一方，ここでは，「［umaʃi］ここに」というように［ʃi］が用いられている。［ʃi］は方向指示の意味機能を有している。例えば，次のように［ʃi］が用いられる。
○ ʃeNdaiʃi ikuNʧuN.（of → of）／シェンダイシ イクンチュン．／仙台に行くって？
○ nahaʃi NɕutaN.（of → I）／ナハシ ンジュタン．／那覇に出ていた。
○ ʃimaʃi ke:ime:ni.（of → I）／シマシ ケーイメーニ…．／島に帰る前に…。

上記のように［ʃi］は，「行く」「出る（＝行く）」「帰る」などの移動動詞と結合し，名詞に移動先，すなわち，移動の方向という意味機能を与える働きをする。

さて，［umaʃi reNwa kakiti］［itta:ʃi reNwasu:taN］［gakko:ʃi ukuriNro］などの文例を見ると，一見，移動とは無関係の動詞のように思われる。しかし，「電話をかける」というのは伝達行為であり，情報の移動と言える。また，「遅れる」も，意識下には「学校に行く」ということが前提としてある。したがって，両者ともに，移動の性質に関与する動詞として考えることができる。そして，［ni］が人称名詞との結合関係が強いように，［ʃi］は場所名詞との結合関係が強いと言える[9]。つまり，ここでは，移動の性質を持つ動詞と場所名詞の二つの条件下のもとで，［ʃi］は方向指示対象を表示する機能として働いていると考えられる。

以上の対象表示機能，相手表示機能についてまとめると，移動に関わる動詞と結合する助詞として［Nka］［ni］［ʃi］の三つの助詞が使い分けられていることが指摘できる。その使い分けは何によるのかを考えると，一つの観点として，移動対象が物質か非物質かということがある。つまり，移動の性質を持つ動詞でも，その性質を細かく見た場合，場所移動なのか，人と人（または生物）との間に発生する移動なのかという違いがあることが指摘できよう。以上のことから，前者の場合は，場所表示機能として働き，後者の場合は，対象表示機能として働いているとまとめることができる。

3.6. 偶発性状況表示機能

偶発性の状況を表示する時，［ni］が用いられる。文例は次の通りである。
○ ɕikoni a:ti re:ɕijataNna: ha:.（of → of）／ジコニ アーティ レージヤタンナー ハー．／事故に遭って，大変だったね，ハー。

上記文例において，「事故」は偶発性の状況である。この場合，「事故」は対象というよりも，状況，状態に当たると考えられる。状況，状態表示の機能は［ni］が持つ時間表示機能に関連があるだろうと考えられ

る。また，日本語の助詞「に」が副詞句や形容動詞との関連から，原義に状態性を指示する性質があることが度々指摘されるように，津堅島方言の［ni］についても状態性との関係を考える必要があると思われる。

3.7. 被所与者表示機能

ある事物が何かの性質や特質を持っているか否かを表現する時，［Nka］が用いられる。文例は次の通りである。

○ Nʤje ʃuNgikuNka ho:geNme:ʧi amje.（of → of）／ンジェ シュンギクンカ ホーゲンメーチ アミェ．／ね，春菊に方言名ってあるね？

○ hoNka kakatena:muN.（of → I）／ホンカ カカテナームン．／本に書いてないのに。

上記では，春菊に方言名があるか否か，（昔のことが）本に書いてあるか否かが話題となっている。すなわち，方言名の被所与者，昔のことの被所与者は，それぞれ，「春菊」「本」である。つまり，「春菊にあるか」「本にない」という構造であると捉えることができる。この場合，両者ともに［Nka］が用いられるのだが，この［Nka］はこれまでにも何度か言及したように，存在動詞と深く関わる助詞である。津堅島方言では，場所表示機能として存在を示す場合，格助詞［Nka］が用いられる。例えば，次のような文例がある。

○ ʤu:suja ja:Nka a:tarumuNna.（of → I）／ジュースヤ ヤーンカアータルムンナ．／ジュースは家にあったのに。

○ n: ja:Nka uibiNro:.（of → of）／ンー ヤーンカ ウイビンロー．／うん，家にいますよ。

上記二例において，［Nka］に承接する名詞は具体的な空間としての場所であるため，本研究では，場所格として取り扱っている。一方，先に取りあげた文例では「方言」「本」というように言語や事物であるため，場所格として取り扱うことは適切ではない。しかし，動詞の「存在」という性質と［Nka］との関わりが深いことは被所与者の意味機能においてもうかがえる。つまり，日本語の格助詞「に」相当助詞として，津堅島方言では［ni］［Nka］の二つがあると認められるが，存在動詞との結合力は［Nka］の方が強い。そのことから，被所与者の意味機能においては，［ni］ではなく，［Nka］が用いられるものと考えられる。

3.8. 対応関係表示機能

二つの事物の対応関係を表示する時には［ni］が用いられる。文例は次の通りである。

○ ne:saNni a:na.（of → I）／ネーサンニ アーナ．／（方言では）姉さんに「アーナ」（と言う）。

○ kainija Nnagwa:ʧi iNba:jo.（of → I）／カイニヤ ンナグゥーチ インバーヨ．／貝には「ンナグゥー」と言うわけよ。

日本のことわざに「猫に小判」「豚に真珠」がある。また，ハンムラビ法典に由来する「目には目を，歯には歯を」という表現がある。これらの「に（は）」は二つのものの対応関係あるいは呼応関係を表示する機能として働いていると考えられる。「猫に小判」「豚に真珠」は，「猫に小判をやるようなもの」「豚に真珠をやるようなもの」というように「やる」という動詞との結合関係であったかもしれない。しかし，「猫に小判」「豚に真珠」と表現した場合，「やる」という動詞との関わりは消失し，「猫」と「小判」，「豚」と「真珠」とが直接に対応関係を結んでいると考えられる。同様に上記文例の［ni］も対応関係を表示する機能として考えることができる。すなわち，「ネーサン」「貝」がそれぞれ方言では「アーナ」「ンナグゥー」という言葉に対応することを示しているのである。

3.9. 受身表現の行為・動作主表示機能

日本語と同様に，受身表現で動作主を表す場合に，［ni］格助詞が用いられる。文例は次の通りである。

○ maruri Nnani wara:ruteigajo.（om → of）／マルリンナニ ワラールテイガヨ．／転んで，みんなに笑われていたけどね。

○ ʃeNʃe:ni nura:ti…（of → I）／シェンシェーニ ヌラーティ…．／先生に怒られて…。

○ iNni u:rattijo reʤijataN.（of → I）／インニ ウーラッティヨ レージヤタン．／犬に追われて大変だった。

○ pukaNʤi aʃiburu ʧu:nu u:mi. kaʤini tuba:ruNrotoka iwarejotta.（of → I）／プカンジ アシブル チューヌ ウーミ．カジニ トゥバールンロトカ イワレヨッタ．／外で遊ぶ人がいるか。風に飛ばされるよ，とか言われた。

日本語において，受身表現で「に」格助詞が用いられるのと同様に，津堅島方言でも受身表現には［ni］が用いられる。この場合，対象表示機能のように，承接する名詞の性質によって［Nka］や［ʃi］が用いられることはなく，［ni］が用いられる。言い換えれば，［Nka］や［ʃi］は対象表示機能という点においては，日本語の「に」格助詞と同様の機能を有しているが，受身表現における動作主表示機能まではその機能を拡張していないと言える。それだけに，津堅島方言においては，「に」格助詞相当の機能は［Nka］［ni］［ʃi］によって使い分けられていると主張できる。また，受身表現における格表示については，自動詞と他動詞との関係及び，助動詞との関係などヴォイス等を視野に入れて考える必要がある。その場合，助詞の［kara］

との関わりを考える必要もあるだろう。

3.10. 使役表現の行為・動作主表示機能

また，使役表現の動作主を表す場合にも［ni］格助詞が用いられる。文例は次の通りである。

○ wa:ni kamautaNro buta.（of → I）／ワーニ カマウタンロ ブタ．／ブタに食べさせたよ，豚（に）。

○ je wa:nuɕu:gwa:ja warabata:ni supurauNʧi ja guna:gwa:….（of → of）／イェ ワーヌジューグヮーヤ ワラバターニ スプラウンチ ヤ グナーグヮー….／ね，豚のしっぽは子どもたちにじゃぶらせると（いって），ね？小さいの…。

「使役」の場合，動作・行為の権利を他人によって与えられると解釈することができるだろう。つまり，権利の譲渡，または付与であり，これは権利の移動と捉えられるだろう。また，［ni］は所有権との関わりがあると先に考察を行ったが，ここでも，「権利」を所有権の一種と考えると，所有権との関わりと見なせる。すなわち，使役表現からも［ni］が人と人（または生物）との関係において，所有権や権利といった非物質の移動に特に関わりが深いことが考えられる。

3.11. 意志要望変化の結果表示機能

日本語では，「信号が赤に変わる」「大人になる」というように，結果表示には格助詞「に」が結合する。しかし，津堅島方言において，「変化の結果」は，無助詞となる。すなわち，格助詞を伴わず，次のように表現される。

○ aNʃi uɸuʧu nati….（of → I）／アンシ ウフチュ ナティ…．／こんなに大人（大きく）（に）なって…。

○ ʃiNgo:nu ao natikara wataiNroʧi ju:sa.（of → I）／シンゴーヌ アオ ナティカラ ワタインロチ ユーサ．／信号が青（に）なってから渡るんだよと言うよ。

しかし，次のように格助詞を伴う文例が見られる。

○ mi:ʧiNka wakiri.（of → I）／ミーチンカ ワキリ．／三つに分けなさい。

すなわち，自分の意志が及ばない自然当然の変化，秩序や規則に従った当然の変化の場合には「無助詞（はだか格）」となり，自分の意志によって何かを変化させる場合，結果に行為者の意志がある場合には格助詞［Nka］が用いられる。

3.12. 強制変化の結果表示機能

強制変化の結果を表示する場合には［ʃi］が用いられる。文例は次の通りである。

○ eNʃi kirikaetakutu iɸirataNro.（of → I）／エンシ キリカエタクトゥ イフィラタンロ．／（ドルから）円に切り替えたから，（切り替えた後のお金は）少しだったよ。

○ mjo:ɕiga oNnaʃi kawatakutu saisjowa nareNkatta.（mf → I）／ミョージガ オンナシ カワタクトゥ サイショワ ナレンカッタ．／名字が（ナカマシから）オンナに変わったから最初は慣れなかった。

3.11. にて，自分の意志が及ばない自然当然の変化，秩序や規則に従った当然の変化の場合には「無助詞」となることを説明した。特に「自分の意志が及ばない」という条件に注目すると，上記文例も無助詞であってもいいはずだと考えられる。しかし，このような場合，［ʃi］が用いられている。「信号が赤に変わる」「大人になる」という場合，その変化は「青→黄→赤」「子ども→大人」というような連続性のもとにある。つまり，「赤に変わる」「大人になる」という結果は，あらかじめ予測が可能である。そして，これらは，外部の力ではなく，ある秩序を旨としたものである。一方，上記文例の場合，何かしらの力による突然変化と言えるものである。「円」→「ドル」，「ナカマシ」→「オンナ」はある秩序にたつものではなく，ある力による強制変化と言える。つまり，変化の結果というよりも変化の方向という方向性に重点が置かれるため，方向の性質を有する［ʃi］が用いられているのは注目すべき点であろう。また，上記文例では変化前の事柄に関しては表現されていないので，省略部分を補ったが，助詞［kara］との呼応関係にも注目すべきだと思われるが，紙幅の都合上，本稿では省略する。

3.13. 行動目的表示機能

例えば，日本語では「海に海水浴に行く」「買い物に行く」という場合，「行く」目的を表示する時には，格助詞「に」が結合する。一方，津堅島方言では，目的表示機能は［ga］格が担う。すなわち，次のように表現される。

○ ja:mi miɕi kumigaikuNʧi iNba:jo.（of → I）／ヤーミ ミジ クミガイクンチ インバーヨ．／あなた，水汲みに行くの？と，言うわけ。

○ mata kumi tuigaNɕuN jamatuʃi.（of → of）／マタ クミ トゥイガンジュン ヤマトゥシ．／また，米取りに（収穫しに）行く，本土に。

○ aNʧi mata ʃimaʃi aʃibi… juru mata aʃibigaku:ʧi isakutu bi:ru mata roppoNiri muʧikisuiga.（of → of）／アンチ マタ シマシ アシビ… ユル マタ アシビガクーチ イサクトゥ ビール マタ ロッポンイリ ムチキスイガ．／それから，また，島に遊び…，夜，また，遊びに来ると言ったから，ビール，また，六本入り持ってきていたが。

このような用法は九州各地で［gja(:)］［gjai］［ge(:)］［ke(:)］［kja:］［ka:］のような形で現れる。おそらく，琉球方言の［ga］も九州地方のそれらと通じるものであろう。また，国立国語研究所による『方言文法全国地図 第１集』では，第21図に「見に（行った）」の言い方が収められている。解説にて，全国的にニの類，エの類，サの類，ケーの類（＝ンカイの類）に分類できると説明し，九州地方の言い方をケーの類にまとめるように符号が与えられている。また，琉球方言に見られる［ga］もケーの類に含め，符号も「ケー」の類に関連した符号が付与されている。つまり，津堅島方言に当てはめて考えれば，［ga］は［Nka］の音韻変化と捉えられるということになる。確かに，用法の面から見ると，［Nka］に通じるものがある。ただし，津堅島方言助詞に［Nka］が存するにも関わらず，［Nka］ではなく，［ga］と音韻を異にして表現されていることを考えれば，慎重な検討が必要であると考えられる。

また，もう一つの可能性としては，格助詞ではなく，接続助詞化の一種と見る見方が考えられる。例えば，「書いておく」「見ておく」などの「て」のような役割を持つものとして見る見方である。この［ga］格が結合する動詞は［ikuN（行く）］［Nɕ̥aN（出る＝行く）］［suN（来る）］の三つの動詞に限られる。これ以外に結合する動詞を自然傍受法では得ていない。つまり，まとめると，目的の条件を提示して下接する動詞「行く」「来る」へ続ける役割を助詞［ga］が担っていると考えられるものである。

以上のことから，目的表示機能を持つ［ga］の語源や発生について，九州を中心に全国的な視点から考える必要があるだろう。また，接続助詞化としての用法とするにしても，津堅島方言や日本語におけるその他の接続助詞との関係とを含めて考察する必要がある。これらについては，機会を改めることとする。

4．［Nka］［ni］［ʃi］［tu］の相関関係

［Nka］［ni］［ʃi］［tu］の動作・作用成立に関わる対象機能の相関関係について，［Nka］［ni］［ʃi］［tu］の助詞の使い分けを中心に考察する。先に記述してきたように，特に，津堅島方言では，日本語の「に」格助詞で表すところを，［Nka］［ni］［ʃi］の三つの助詞で使い分けている。その用法の使い分けは何によるのかを明らかにする。また，日本語でも「に」と「と」の二つの助詞の使い分けが見られるように，津堅島方言でも，「に」格助詞相当助詞と格助詞［tu］との使い分けが見られる。その使い分けについて，分析考察を行う。

4.1．対象表示機能における［Nka］［ni］［ʃi］［tu］の相関関係

日本語の「に」格助詞の機能を津堅島方言では助詞［Nka］［ni］［ʃi］が担い，使い分けが見られる。先の分析考察をもとに，その使い分けは何によって生じているのかをまとめると，次の通りである。

［Nka］：①人以外の物質が対象となる。②移動の動作に関わる動詞との結合関係がある。

［ni］：①人が対象となる場合。②道具などの物質や情報などの非物質などの移動に関わる動詞との結合関係がある。

［ʃi］：①方向指示対象となる場所が対象となる。②移動の動作に関わる動詞との結合関係がある。

「に」格助詞相当の助詞の［Nka］［ni］［ʃi］は，移動の性質を持つ動詞と関わり，動作・行為の目当てや相手を選択し，一方的に関係を成立させていると言える。特に，［ni］は人との関わりが見出される。また，同様に［Nka］は人以外の物との関わりが見出され，［ʃi］は方向との関わりが見出される。特に［Nka］と［ʃi］は場所格の意味機能との関係があると考えられる。

一方，また，格助詞［tu］が似た機能として働く場合がある。共同動作の相手，共に動作する者を表示する機能を持っている。その文例は次の通りである。

○ ruʃiNsa:tu maNna ikuNtsuN.（of→of）／ルシンサートゥ マンナ イクンツン．／友達と一緒に行くって。

○ na tu:ʧi oNnasaNtu panaʃiɸuiga jasaija:Nɕ̥itʃirutaija.（of→of）／ナ トゥーチ オンナサントゥ パナシフイガ ヤサイヤーンジチルタイヤ．／もう，いつもオンナさんと話するけど，野菜屋でといったね。

○ ni:saNtu gu:rataNtsuN.（of→I）／ニーサントゥ グーラタンツン．／（おじさんは）兄さんと（バレーの）仲間だったって（バレークラブで同じチームだったことを意味する）。

格助詞［tu］が結合する場合，同様の動作・行為がなされること，あるいは，動作・行為が同時に成立することが条件となる。具体的言えば，一例目では，話し手の「行く」という行為と同様に，友人も「行く」という行為をする。すなわち，動作・行為の一致である。また，二例目では，「話する」という行為がお互いによってなされることにより成立する。すなわち，動作・行為が同時になされる，または，二人以上の複数人によってなされることによって動作・行為が成立すると言える。そして，この場合，その相手を表示する場合に，［tu］が用いられる。こうした用法の使い分けは日本語の「に」と「と」に通じるものがある。いわゆる依拠の「に」と与同の「と」である。

また，三例目も先の二つの文例と同様の性質を持つ

［tu］が接続していると考えられるが，所属の一致を表す場合も，同様に格助詞［tu］が用いられる。この場合，状態の一致性や同時成立性といった特質を見出すこともできる。すなわち，両者（この場合おじさんと兄さん）が同時に同じ状態にあったことを表している。したがって，状態の一致性として捉えることができよう。

以上のことから，格助詞［tu］は「一致性」「同時性」「共同性」の性質を有した助詞であると言える。

4.2．変化の先取り結果（意志要望結果）表示機能における［Nka］［ʃi］［tu］の相関関係

変化の結果表示の場合，多くは無助詞で表現されるが，［Nka］［ʃi］が用いられることがあることを3.11及び3.12で先に述べた。それらをまとめると次の通りである。

無助詞：①秩序を旨とする変化の結果を表示する。
［Nka］：①行為者の意志が反映される変化の結果を表示する。
［ʃi］：①外部の力による強制変化の結果を表示する。②方向性の性質を有する。

無助詞の場合も［Nka］や［ʃi］が用いられる場合も，変化は一方向的な変化である。これは，対象表示機能と同様である。一方，［tu］の文例を挙げると次の通りである。

○ urisatsu: gohjakueN ta:ʧitu ke:tituraha Nga.（of → of）／ウリサツー ゴヒャクエン ターチトゥ ケーティトゥラハンガ．／この札（を）五百円二枚と換えてくれませんか？

○ kaNkokunuhitutu mi:tunatijo.（of → I）／カンコクヌヒトゥトゥ ミートゥナティヨ．／韓国の人と夫婦になってね。

上記文例において，［tu］も意志要望変化の結果（同等関係成立時）を表示する機能として働いていると考えられる。ただし，その変化は一方向的なものではなく，双方向的なものである。すなわち，一例目の文例を見れば，札（千円札）一枚が五百硬貨二枚への変化と見えるが，それは同時に札（千円札）一枚と五百硬貨二枚が同価値のものとして代替されたにすぎない。つまり，本質の変化ではなく，形態上の変化にすぎない。二例目についても，夫婦になるということは一人の人間の本質が変化しているのではなく，二人の人間の関係形態が変化したにすぎない。それに対して，無助詞［Nka］［ʃi］は本質の変化として言及することができるだろう。特に［ʃi］の場合は本質の変化が色濃い。まとめれば，［tu］は双方向的な変化であると同時に，形態上の変化の結果表示の機能を持つと言える。

5．まとめ

本稿の結論は次の五つである。

1．津堅島方言では対象表示機能を［ni］［Nka］［ʃi］の三つの助詞が担っており，承接する名詞及び結合する動詞によって使い分けられている。

2．特に，動詞が「移動」の性質を有する場合，対象が人の場合には［ni］，人以外の物質の時には［Nka］，方向性を特に指示する場合には［ʃi］が用いられる。また，［Nka］［ʃi］は場所表示機能との関わりを有することが指摘できる。

3．対象表示機能として，日本語の助詞の「と」に当たる［tu］がある。日本語でも「に」と「と」とが相関関係を持つように，津堅島方言においても，［Nka］［ni］［ʃi］と［tu］とは相関関係を持つ。

4．対象表示機能において，［Nka］［ni］［ʃi］は，移動の性質を持つ動詞と関わり，動作・行為の目当てや相手を選択し，一方的に関係を成立させていると言える。他方，同様の機能を有する［tu］は，共同動作の相手，共に動作する者を表示する機能を持っている。

5. 結果表示機能において，無助詞，［Nka］［ʃi］は一方向的な変化の結果，本質的な変化の結果表示の機能を有している。一方，［tu］は双方向的な変化，形態上の変化の結果表示の機能を有している。

本稿で取り扱ったのは，動作・作用の成立に関与する対象・結果・目的表示機能である。それぞれの機能について［Nka］［ni］［ʃi］の相関関係を記述し，一つの結果として，提示することができたと思う。また，［tu］との相関関係についても言及し，諸助詞が持つ機能の特質を整理できたと思う。さらに，［Nka］［ʃi］についても，場所格，方向格の機能との関連からその性質を「存在」「方向」を有するものと結論づけられたことは成果の一つと言えるだろう。

【注】

1）国語学会（1951）にて阪倉篤義の唱えた説である。「と」と共に副詞構成語尾の「に」との関係が考えられるとする。「に」が「草を冬野に踏枯し（万葉11・2776）」と副詞句を作ることに注目している。それを「賢しらに行きし荒雄ら（万葉16・3860）」などの副詞用法に照らし合わせて，格助詞「に」に，副詞語尾の「に」の用法との関係を見出し，副詞語尾「に」からの発生説を唱えるものである。

2）此島正年（1966）にて，「に」「と」の両語を取りあげ，助動詞，形容動詞語尾との関連より，「に」が状態性を指示する意義を持つことから，格助詞

「に」も本質としては，状態性を指示するものであるとする。

3）森重敏（1948）にて，時間概念を総括限定する「な」を根源とする説である。なお，「な」と「に」との差異は，「な」が詠歎性を有し，「に」は冷静な判断的陳述の性質を有している点にあるとする。

4）金沢庄三郎（1912）にて，「に」の与格機能は，位格あるいは，役格から転じたものとし，その語源が動詞であろうとする。

5）「に」と諸助詞との相関関係，使い分けの研究として，主に次のような研究がある。此島正年（1953）「助詞「に・と」の相関－万葉を主として－」，鈴木英夫（2001）「格助詞と動詞－「～に似る」と「～と似る」を中心に－」，青木伶子（1956）「「へ」と「に」の消長」，柏原卓（1979）「格助詞「に」「を」と動詞『平家物語』を中心に」，山田敏弘（2003）「起因を表す格助詞「に」「で」「から」」などがある。

6）仁田義雄，益岡隆志編（2000）のモデル図を参照。

7）動詞と助詞との結合関係，語順による助詞の機能の研究は，主に，宮島達夫，村木新次郎らによってなされている。

8）文例の冒頭に付した△と○の記号は以下のことを示す。△は筆者による津堅島方言の作例であることを示す。なお，津堅島出身の恩納トヨ（昭和３年生），又吉幸子（昭和23年生）の確認を受けた。○は自然傍受法によって得られた文例であることを示す。また，om は老人男子，of は老人女子，mm は中年男子，mf は中年女子，I は筆者の又吉里美を示す。なお，→は会話の方向を示す。

9）又吉里美（2006）を参照。津堅島方言助詞の［ʃi］［Nka］［ni］の場所格と方向格の意味機能についての研究である。特に，［ʃi］は方向との関係が深く，［Nka］は存在との関係が深いことに言及した。

【参考引用文献】

青木伶子（1956.1）「「へ」と「に」の消長」『国語学』第24集　pp.107-120　武蔵野書院

内間直仁（1984.2）『琉球方言文法の研究』　笠間書院

江端義夫（2003.3）「渥美半島方言助詞の研究 前篇」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部　第51号　pp.71-80

奥津敬一郎，沼田善子，杉本武（1986.4）『いわゆる日本語助詞の研究』　凡人社

金沢庄三郎（1912.12）『日本文法新論』早稲田大学出版部

柏原卓（1979.2）「格助詞「に」「を」と動詞－『平家物語』を中心に－」『和歌山大学教育学部紀要　人文科学』第28集　pp.33-41

金城朝永（1944.8）『那覇方言概説』　三省堂

国立国語研究（1951.5）『現代語の助詞・助動詞』　秀英出版

国立国語研究所（1989.6）『方言文法全国地図』第１集　大蔵省印刷局

此島正年（1953.1）「助詞「に・と」の相関－万葉を主として－」『国語学』第11輯　pp.55-63　武蔵野書院

此島正年（1966.3）『国語助詞の研究』　桜楓社

鈴木英夫（2001.3）「格助詞と動詞－「～に似る」と「～と似る」を中心に－」『日本語学』20巻３号　pp.44-52　明治書院

国語学会（1951.6）『国語の歴史』　刀江書院

高橋俊三（1991.2）『おもろさうしの国語学的研究』　武蔵野書院

名嘉真三成（2000.5）『琉球方言の意味論』　ルック

中松竹雄（1987.11）「おもろさうしの国語学的研究Ⅰ－助詞「に」の用法－」『琉球大学教育学部紀要』第31集 pp.9-57

中松竹雄（1987.11）「琉球方言の言語地理学的研究Ⅱ－格助詞その２－」『琉球大学教育学部紀要』第31集　pp.1-7

西岡敏（2004.1）「沖縄語首里方言助詞「ンカイ」「ナカイ」「ニ」「ガ」「カイ」－共通語の助詞「に」「へ」と対照させつつ」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』第９巻１号　pp.1-11

仁田義雄，益岡隆志編（2000.9）『日本語の文法１　文の骨格』　岩波書店

野原三義（1986.2）『琉球方言助詞の研究』　武蔵野書院

橋本進吉（1969.11）『助詞・助動詞の研究』　岩波書店

又吉里美（2006.3）「沖縄津堅島方言の格助詞「シ［ʃi］」と「ンカ［Nka］」と「ニ［ni］」」『広島大学大学院教育学研究科紀要』　第二部　第54号　pp.113-122

松下大三郎，徳田政信編（1978.12）『改撰標準日本文法』　勉誠社

宮島達夫，仁田義雄編（1995.10）『日本語類義表現の文法』　くろしお出版

村木新次郎（1991.2）『日本語動詞の諸相』　ひつじ書房

宮島達夫（1994.12）『語彙論研究』　むぎ書房

森重敏（1948.5）「修飾語格小見（二）－上代の助辭「な，に，の，が」－」『国語国文』第17巻第３号　pp.29-55　全國書房

山田敏弘（2003.6）「起因を表す格助詞「に」「で」「から」」『岐阜大学国語国文学』第30巻　pp.13-23

山田孝雄（1936.5）『日本文法學概論』　宝文館出版

付記　本稿は広島大学教育学研究科言語文化教育学講座の江端義夫先生にご指導頂いて成ったものである。また，英文アブストラクトについては，Dr. Wayne P. Lawrence（University of Auckland）先生よりご教示頂いた。記して感謝申し上げる。

（主任指導教員　江端義夫）